

従軍慰安婦という悪質な虚構

(最終章)

【心の内にある明德を磨く】

皆が幸せでなければ、自分一人だけでは本当の幸せを感じることが出来ません。つまり、皆が暮らしているこの「社会」が幸せでなければ、私個人も幸せにはなれないという事ですよね。思えば戦後、経済効率や利便性、機能性を追い求めて少しでも早く、少しでも便利に、少しでも豊かに…と、必死に努力精進し、数年の間に世界第二位の経済大国にまで登り詰めました。その一方で、自分さえ良ければ何をやっても大丈夫とばかりに、人の真心や気遣いなど脇に置いて、物が主人公になってしまいました。幸せな人達を作る社会は、幸せなはずです。かつての日本がそうだった様に、物の利便性という経済性ではなく、人間の内面の豊かさこそを重視する方向に、日本は戻るべきではないでしょうか？私達一人一人が意識を変える事で、社会は変わります。仏教は智慧と慈悲の教え。その智慧に学び、心の内にある、誰もが持っている明德という人

間的器を磨くこと。仏教的には、心の内に備えている「仏種」を育む努力をするのです。それが、社会を変える原動力になります。日本、ひいては人類の病根は、『無知』に帰結する事を、今こそ自覚したいものです。

【日本の病根は無知？】

さて、従軍慰安婦問題です。日本国内にも「従軍慰安婦があった」と信じている人が非常に多い。それもそのはず、教科書に載っているものを学校の授業で教えられ、覚えさせられているのですから無理ありません。そもそも「従軍慰安婦」なる言葉を作り出したのは、千田夏光氏という日本人の作家であり、それを朝日新聞社や毎日新聞社が広め、そこに韓国が乗っかってきた形です。南京大虐殺も全く同じ構図。《朝日新聞社》は今や中国の言い分を代弁する、中国の出先機関となっていると言っても過言ではありません。その証拠に、業務提携を結んでいます。中国新聞である《人民日報》の社説を翻訳し、そのまま《朝日新聞》の社説として出している事もあります。また私達の多くが中立だと思っている《日本経済新聞》もだいたい中国の影響を受けている様です。ここ数年の間「中国

市場にビッグチャンスあり」と煽りまくっていた中心には、《日本経済新聞》の存在があります。今の時代、侵略や占領というのは、兵器を持って乗り込んでくるだけではありません。その国のマスメディアを他国が牛耳っている現状を考えれば、日本は半分侵略されていると考えてもいいかもしれません。

【慰安婦捏造の対処方法】

最近では戦前の事を知る人が少なくなりました。その事が虚妄をより強く事実として信じさせる条件にもなっています。

安倍首相の口から慰安婦問題の事実を具体的に説明して頂きたいと念願します。慰安婦を集めるのに国は関わっていないこと。当時は売春が公認されている、その業者が戦場での慰安所経営に当たったこと。慰安婦には日本人も中国人も朝鮮人もいたこと。ただ日本軍は慰安所の治安維持には関わったこと。それはそこを利用する兵隊の安全を守るためと、性病の蔓延を防ぐためだったこと。またこれは、被占領地の女性に対する安全対策でもあったこと。時代を経て、今ではそれを裏付ける証拠はいくらでもあります。日本は戦場となった現地の女性に被害を与え

ないために、自国(当時の朝鮮は日本)の女性を集めて日本や朝鮮や中国の業者が慰安所を設置する事を認めていました。では、日本を占領した米国はどうか？これに関しても先月号に詳しく記しましたが、日本に米国の女性ではなく日本人女性を集めて慰安所を開くように命令したのでした。その命令書も残っています。日本の処置と米国の処置と、どちらが人道的なのか、と改めて問いたい。

昭和二十年(一九四五)三月十一日、十万人の一般人を焼き殺した東京大空襲は何？六十四もの都市に加えた無差別攻撃は何？最初から軍事目標と一般人を区別しない兵器である原爆の、広島と長崎の投下？それにより終戦が早まり、何百万もの命が救われたなどという詭弁は、絶対に許してはいけません。原爆は明らかにホロコースト(大量無差別虐殺)でした。東京裁判のパール(インド人)判事も米軍の原爆について、戦争終結を早めるための一般住民の殺傷は許されないとし、ナチスのユダヤ大量虐殺に相当するものだと指摘しています。また東京裁判ではアメリカ人弁護士も米国が日本を人道

問題で非難するのはおかしいと指摘しています。ホロコーストをやった国に人道を云々する資格はないでしょう。

それにしてもこれまで多くの機関や人がこの従軍慰安婦問題を調査研究したが、国や軍が組織的に女性を強制連行して従軍慰安婦としたという事実は一件も見つかっていない。

見つからないはずです。そういう事実は絶無だからです。何度も記していますが、民間業者が女性を連れてきて、戦場の近くで商売を営むという例はありません。だがそれは業者

が商売としてやったことで、国や軍の強制連行とは無関係です。従軍慰安婦は無かった、事実では無いといくら言っても広がらない。そしてインフルエンザの流行の様に従軍慰安婦をネタにした日本非難が繰り返される。何故か？先月号で記した河野談話が従軍慰安婦問題の何よりの論拠になっています。これこそが慰安婦問題の核心であり、ガンなのです。では、どうすればいいのか？談話の主である河野洋平氏が公式の場で、「調べてみたが従軍慰安婦は事実ではなかった。それを認め、謝罪

した自分のあの談話は間違いだった」と表明し、談話を取り消せばいいのです。それで根本からスッキリし、従軍慰安婦問題での国際社会での非難に対処していくことができるでしょう。付け加えれば元首相の宮澤喜一氏も自分の間違いを公式の場で認める必要がある。宮澤氏は教科書検定で「侵略」を「進出」と書き換えさせたという誤報について、そんな事実はなかった事が明らかにした後、近隣諸国の感情に配慮した歴史教科書にすると公言しているのです（近隣諸国条項）。

【まとめ】

ある事実があったことを証明するのは比較的容易です。資料や記録や証言を調べて、その事実があったことが一つでも確かめられれば、その事実があったことが確定できるからです。しかしそんな事実は無かった事を証明するのは非常に大変な困難を伴います。あらゆる資料や記録や証言を調べても、その事実があったと証明するものが見つかからない。だからといって即、そんな事実は無かったとはなりません。まだ調べ残した部分があつて、そこにその事実があつたことを示し証拠があるかも知れないからです。その難しさを

利用して、邪な意図のもとになされるのが歴史の捏造(ねつぞう)です。従軍慰安婦の問題はまさにその典型です。

【最後に…】

夜明け前の闇が一番深いと言います。生きるとは、無知を知に変え、弱さを強さに変える事です。苦しい時、辛い時こそ、その事を思い出して下さい。闇に沈まず、夜明けに向かって少しずつ進んでいくと決意して下さい。あなたのその決意こそが、朝の美しい光を連れてきます。

合掌 副住職 谷川寛敬

ちょっと一服

とおひさまの修行？

芸能人やスポーツ選手によく見かけますが、その人がいるだけで、その場が明るくなる方っていらつしやいます。華があるっていうのでしょうか。みなさんの回りにもいらつしやるのではないのでしょうか？ そんな姿を自分も身につけようと努力してみませんか？

仏・菩薩像のように微笑んでいると周りの方が安心し、その場が明るくなります。無表情でいると「不機嫌なのかな？」と周りが心配や恐れを抱きます。本人はいたって普通に過ごしているのですが・・・。

微笑みは心がいら立っていると出来ません。微笑むためには感情・気持ちを穏やかに保つ意思と努力が必要となります。その努力がご修行であり徳を積むこととなります。

法華経の中で菩薩の姿をこのように説かれています。

おひさまや月の光が暗い所を除くがごとく、修行者がそれぞれの生活の場で人々の闇を照らす。大きなことのように思いますが、自分の心を穏やかにする。意思・意図をもって微笑み、周りの人の心をも穏やかにする。そのひとつひとつの積み重ね、思いやりが自分と同時に他人の心の闇をも取り除くのです。

このご修行をおひさまのご修行・菩薩のご修行と言います。

お題目は神仏に依存・すがらためものではなく、おひさま・菩薩のご修行をする宣言であり、信念を作り、実行するための源でもあります。